山岸文庫蔵『古今和歌集聞書』翻刻（三）

杉山友美
西澤美仁
牧野和夫

前々号（実践女子章学文芸資料研究所『年報』十八号「山岸文庫蔵『古今和歌集聞書』翻刻（二）」）に引き続き、本稿では第三冊を翻刻する。

【凡例】（各冊において朱墨の割合に差があるため、朱墨表記に関する凡例は各冊ごとに定めることになる。）

一、本翻刻は実践女子大学図書館山岸文庫に所蔵される『古今和歌集聞書』（五冊）を底本として翻刻を進める。

一、本稿では第三冊を翻刻する。

一、原本の行取り、改丁に準じ、墨付丁数及びオ・ウの省略符号を付して（「1オ）の如く示す。

一、漢字は原則として通行の字体を用いる。異体字（ㄱ）（メ）はそれぞれ（コト）、（シテ）と示す。

一、問答の頭左右に朱で合点が記されているが、（＼、／）と示す。

一、頭書並びに合点は朱で記されている。本文中における朱の書入は（〔　〕）で示す。

一、書名符及び朱引等は煩雑を避けるため今回は省く。

一、傍注は本文より活字のポイントを下げて原本に準じ、傍記する。

一、虫損等による欠字分は□を以って示す。

一、一つまた複数の「ヒ」を以って記されている見せ消ちは本文左傍に（ヒ）と示す。

共五

圓蔵坊

古今和歌集第三

元超蔵

」前表紙

」前見返し

古今和歌集巻第七

○賀哥

先賀は上膓は年の十二に満する時春秋の祝ニ有春の祝をは
花の賀といひ秋の祝をは紅葉の賀と云也是は必年の数神供
を備へて年の数の事をして神に手向るなり或は舞詩歌管
絃になり　我君の哥にちよにやちよにと云に二義有

ちよにや千代に

家隆には千世にや千代にと書り是も二千世やと云は久しき事を
こめて云也　当流ニは不然千世弥千世ト書リ　苔のむすとは
重ルを云也　万葉云　水隠礼野井関之巌苔重天幾世賀
経尓紫玉野井野河　されはむすとはかさなれるを云也又繁き義也
茂の字也此哥は延喜御門春宮の御時寛平七年正月に人々をめして
哥よませ給ひけるに読ル也　わたつうみの哥に君はちとせのありか
すにせむとは君かちとせを経へき数にせむと云也此哥は同し御門
を祝ひ奉て読ル貞信公の御哥也しほの山さしての磯は越後
の国に有しほの山の哥にやちよとは弥千世也此哥は忠仁公の関
白のさかりなりし時を読給染殿の内侍哥也わかよはひの哥は延
喜の末春宮の御哥廿の御賀の時よみ給貞信公の御哥也やちよ
とは弥千世也仁和の御時とは光孝天皇也遍昭か七十の賀とは

ありかすにせん

」1オ

かくしつ
天子自ラコトヲ
君かとの給ふ
二葉
白かねの枝
ちとせの坂

遍昭七十の賀花山の家にてしける時読て遣す哥也遍昭は
彼御門(ハハカタ)には御母方のおち也　哥にかくしつゝとは如此しつと云
義也君かやちよとは王の弥千代にあふよしもかなと云義也さ
れは我事を君かと読給也仁和の御門の御おはとは文徳天」1ウ
皇第一の姫宮孝子(カウシ)内親王に一条の宮ト号す　白金の杖を
作りてとは必す御賀に太杖と屏風とを結構にする也哥に
ちとせの坂とは老のさかりなり老は行に随てくるしき故に坂にた
とふ文選云千年栄華は作為ニ後世一誰レ人カ帰ニ行跡一ニ唯タ独リ悲ム
老坂ノ道長房利麒(キカ)永命終ニ是不レ逗孫公圣王ノ得レ(リシ)徳其レ未レ満
万歳ヲいへり是は魯ノ哀公ノ遁世ノ心座テ書給詞也孫公圣王は共に御
門也仙を好て地仙となりしかと前議をは給すといへり長房利麒
も仙人なれども無常には随ぬと云心也されは千世の坂とは老の坂也
古撰云　立帰(タチカヘル)留習(ヒコソナレ)ヒ古曽(ヲ)無礼老野坂越(ノサカコヘ)天苦幾路尓哉有(テクルシキミチニヤアルラム)無
堀川のおほいまくち(ウ)きみとは昭宣公此時はいまた関白にならすして
右大臣にて座しける時の事也四十の賀は貞観十八年三月也九条の家とは
未関白に座シける時九条の家にすみ給ひけり今の九条殿の
御所是なり後は堀川に御所作てすみ給ひけれは堀河殿と云也
桜花の哥にちりかいくもれとはかきくもれと云心なりお」2オ
ひてのこひと云なる道まとふかにとは桜は年わかき時の
花なれは散くもれその香のにほはゝ老の道まとひて
よもうしと云也公任老後の述懐の賦云　遠霞埋レ路ヲ
老ノ来(キタラン)方(カタ)山花隠レ(セ)跡ヲ傾ク齢ノ隈(クマ)是も此意書リ貞辰(トキ)ノみこト
は于時中務卿ノ三品清和第七ノ王子也をはとは御母方のをはなり

かいくもれ

かめのをの

賀は三月
十月に有也
二葉

三葉

忠仁公の御いもうと教子（ノリコ）よそちは四十也大井とは大井河也彼教
子の御所かしこに有亀のをはかめ山なり哥ニ別義なし紀ノ惟岡（コレヲカ）
トは淑人（ヨシヒト）の一男也貞保のみことは清和第三の皇子一品式部卿
岡村ノ宮ト申是也又南院殿とも号す后の宮とは御母二条の后也
彼后の五十の御賀は元慶七年三月也賀はかならす三月十月
に有哥ニ無義本康の御子トは仁明天皇第九ノ御子一品式部卿八
条ノ宮と号す七十ノ賀は昌泰三年の春也哥に無義　いにしへ（に）
にありさあらずはの歌は本康みこの御賀の時の哥也（ヒ）哥無
義　ふしておもひの哥無義同時の哥也　藤原三善トは于時
長門守此人冬嗣ノ第十二ノ子也しと秋経（アキツネ）ノ侍従の養子とす秋
経は冬嗣の兄也此人は滋春かしうと也鶴亀の哥無義侍従
時春は滋春か一男也良峯の経成は于時中納言遍昭か兄也
姫にかはりとは遍昭か姫にかはりて読也彼姫は素性かいもう
と也萬代の哥無義内侍のかみとは泉（イヅミ）ノ右大将定国ノ娘満子（ミツコ）也
四条の宰相源ノ顕景（アキカケ）ヵ室也顕景は文徳の王子也右大将藤原朝臣ト云は定
国か事也　春日野の哥に若菜つみて祝すると云事は序に
如レ云　山たかみの哥義なし　めつらしきの哥無義すみのえの
哥に無義　千鳥鳴の哥無義（さほの河は山城ニ有　千鳥は冬の物也）　秋くれはの哥無
義　白雪の哥無義　春宮むまれ給へりとは延喜第二ノ王子保
明親王延喜三年四月十一日御誕生同六年太子ニ立ッ同年元服（アリ）
峯たかみ春日の山に出る日とはみこの生レ給を云春日は藤原の氏
神也此王子は昭宣公の御むすめ也小河の女御の御はら也されは
春日の山を出る日と云也

」2ウ

」3オ

（約二行分余白）

古今和哥集巻第八　　○離別哥

たちわかれいなはの山の哥は清和の御時行平因幡守成て
下ッける時行平の母遁世してかつらに住給ひける所へ
読てける彼母ハ惟條ノ親王ノ娘メ光仁天皇ノ御孫也哥無義
すかるなくの哥はすかるとは鹿也此哥は神亀元年八月に聖武
天皇伊勢太神宮に行幸あり聖武ノ后キ光明皇后宮王ノ
出給ひ御袖をひかへて読給哥也皇后宮は淡海公不比等御娘也
かきりなきの哥は小野篁嵯峨天皇ノ御時隠岐の国へ流れて
行ける時中納言藤原兼輔卿へ読て送ル哥也兼輔は良門ノ三男也哥
無義　小野千古于時左中弁篁の孫大納言好古か三男也哥無
義　たらちねとは母也又たらちめとも云たらちをは父也万葉
生親男　生親女ト書リ　万葉云　八岡行道野末古曽遠建礼登
我生親女野事波忘紫といへりやをかゆくとは大唐ニ南州へ越ル
道ニ八ノ坂有虎多くして人いきて帰る事すくなしされは旅
の道の悲しさは必すやをか行と読る又は八百日ゆくと書て
やをか行と読り是も大国の事也おやのまもりとあひそふ
ると云は本文をよめり西州ノ丸山ハ雖隔左右ノ里ヲ思フレ子ヲ意ハ
不レ為子守乎此文政纒ニ有文の意ハ丸山トハ天台山ヲ具シテ大なる
山九ノ有胡通ト云ッ者親深くいとおしかる家賓ックなりて
彼丸山を越てあなたなる国に金有纒ナルあたひを持て
行ぬれは多クの金を買フ彼胡道此金かいに行ク出立より
して親しはしも忘るゝ事なく恋かる或山の中を行ク鬼来テ

すかるなく

たらちね
たらちを

」3ウ

」4オ

」4ウ

取ントス夢の様なる心地して大なる袋をうち着する様に覚け
れは鬼見つけすして不取不思議と思て其夜ねたりけ
れは夢に母みへて云我汝を深く思故わかおもひ汝か守りと
成て汝をたすけたりと云夢さめて後ヲ深孝養の志ッ深タな
れり此文の意を読リける哥也　貞辰のみこトは同上ニ藤原ノ
清文トハ彼家のみこに仕まつりし人也是は播磨守百家か一男近
江ノ介ニ成て行トハ清和の御時也哥に夜やふけぬらむ袖の露け
きと云事は夜ふられは必す露は置まさる意を云也　こしへ
まかる人とは紀時文越前ノ守成て延喜ノ御時ゆくなりかへる山
とは越前有哥無義人の馬のはなむけとは橘の延幹延喜の御時
からものゝ御使を給て延喜の始に筑紫へ行ける時人々あまた
馬のはなむけしける時読ル也貫之は延幹にはあひむこ也しうと
は兵部卿紀為俊後名をあらためて長親と云是は淑望か二男也
唐物使トハ唐より日本へ宝内渡ルニ請取ニ行御使也　おしむからの
哥義なし　友たちの人の国へ行とは紀の有恒甲斐守にて
ありし時其二男利貞か親のもとへ下りける時滋春かもとへ
よひて餞なとして読ル哥ニ義なし　あつまの方へまかる人とは
大江千里駿河守になりて寛平の御時下りけるに読ルなり
伊香胡の敦行是は近江の国ノ住人嶋ノ上ノ在庁伊香胡
内丸カ子也宇多天皇ノ御時内裏北ノ番に参りて月夜大庭に
侍りけるか月をみて一首哥を読ム新撰集ニ入レリ其哥ニ云
久かたの雲井にちかき月影を心のまゝになかめつるか
な此哥を御門聞召して召出て昇殿をゆるさる于時修理権ノ

かへる山

」5オ

」5ウ

たくへてやる
そへてやる

二葉

小進に任す哥に　身をしわけねはとは志ヲ思へとも
身をは分てやらねは心を君にそへてやると読ル也
逢坂にて人を別るとは仁明天皇ノ御時万男カ兄ニ難波ノ千兼
下総ノ拯ニ成て下りける逢坂まて送りて読ル也是は難
波ノ万人カ子也哥無義　から衣の哥藤原の時平ノ卿未
中将ノ御時筑前守に成て下りける時陽成天皇の姫宮を
北のかたにし給ひたりしか近院右大臣能有の娘を北ノ方ニ
して彼姫宮をはすさめ奉りて津の国あしやの里に家作
して捨置キ奉テ今の北ノ方を具して筑紫へ下り給ふとて
彼あしやの里に来給ひたりけれとも彼宮の許へは座ま
さすしてこと所に留てそこより明日筑紫へ下ると計リ
いひやりたりけれはとかく返事はなくして此哥を読て送り給
唐衣とは大臣以下の人には読へからすけぬへき物とはき
えぬへき物と云事也常陸へ罷けるとは藤原ノ公俊彼寵か
許にかよひける延喜の御時公俊常陸守に成て下けるに読て
遣ス公俊は勧修寺の右大臣定方ノ一男寵は源の弼か娘なり此人
に多ノよみ有　ウツク　メヅラシメツク　ニホウ　雖然不レ知其義ヲ
あさなけにとは　あけくれなり万葉云　玉野井野水草
毛陰留五月雨野朝暮尓雨旬野閑シ佐旅を草枕と云
事は大方賤キ人ノ習テ草なんとを枕にする事有されとも漢
書注ニは高祖ノ項庄ト軍サせし時項庄軍ニまけて逃ケ行
程に深野ト云野に日数留リ居て草を結ひて枕にしけり
其意を倫寧カ遠行ノ記ニ云遠行ノ旅泊鐵ヲ片敷道ニ二月ヲ出

から衣
けぬへき物を

あさなけに
旅を草枕
と云り

」6オ

」6ウ

まかり申

をちに

ありて

四葉

り是は文章博士藤原ノ倫寧伊与国へ下ッける道の間の
事を記たる物也されは草枕と云事は是よりいひ始メたり
紀ノ宗定トは紀ノ良定カ子也淳和天皇ノ御時遠江国へ下りけ
るか妹参河守親澄カ妻ニテ参河ニ住ける所ニ一夜留て朝出立と
て暇乞けるに妹の読ル哥也まかり申トはいとまこふ心也哥に義
なし　あひしり侍ル人のあつまへ行とは大江の千古カ武蔵国へ
下りける時也千古は千里か兄朝綱か男也哥にわかると人にみゆは
かりなりとはおもひける心はかよへは身斗りなと見ゆるなりと
よめり　友のあつまへとは延喜御時真静律師東国へ下りけ」7オ
る時也真静は平の元規か事　良峯秀岡トは于時民部大夫経
成か孫経景か子也哥に心をぬさとくたくとはあなた但心のく
たくるをぬさをちらしたるに似たりと云也　陸奥国へ
下る人とは忠峯陸奥国へ目代にて下る也哥にをちとはあなた
と云義也人をわかれけるとは同し人なり哥無義　あひしれる人の
うしにとは紀ノ利貞か甲斐国に下りし時哥になにそはあ
りてとは名にありてと云義也　きてもとゝまらぬなにこそ有
けれとは帰ると云名は都へ帰ると云名はかり欤とおもひたれは
又越路に帰る名にこそ有けれと云義也　こしの国へまかる人人
とは同し人也哥無義　をとは山にて人を別とは忠峯か東へ下
りし時の事也哥に無義　藤原ノ俊陰同レ上唐物とは同レ上ニ是は」7ウ
延喜ノ御時事也延喜二年月九月也　うへのおのこともとは定文貫
之等也兼茂は于時左衛門佐也良門か一男哥に無義　次ノ哥も
同し時の哥也元親トは于時左衛門督中将篤行カ子也　秋霧の

白女
神並森
かへりかてに
人やりの道
いきこし
身にし
　あれは
人たのめ
　なる

哥に無義　源ノ実とは于時但馬守筑紫へゆあみにとは筑後
御湯あみに行也　白女は江口の遊女也　いのちたにの哥無義
山崎のあた神なひの森と云は山崎に有是は賀茂の明神と
春日の社を並て崇ニ依て神並ノ森と云也　かへりかてに
するとはおくりの人々の帰りかたくするを云をくりの人々は藤
原の兼輔兼茂等也哥に人やりの道とは人のやるみちにて
もなきにと云也　いきうしとはいきたくもなしと云事也した
はれての哥に義なし但ッ身にもあれは身てあれはと云意也
藤原ノ惟岡トは于時小将国経ノ大納言の三男是は武蔵介に
下る事は光孝天皇の御時也　かつこえての哥に人たのめなる
名にこそ有けれとは相坂の関ト云は名はかりにて別れの道
成けりと読ル也　大江の千古北へまかるとは延喜の御時加賀
守ニ成て下るを云藤原兼輔は良門か三男于時中納言　君
かゆくの哥にゆきのまに〳〵とは雪のひま〳〵也花山に
人のまうてきてとは遍昭かおち加陽ノ親王まし〳〵て帰
り給ひけるに読ル也此加陽ノ親王桓武第十二ノ御子桓武崩
御ノ時出家して道雲法親王といへる夕暮のまかきはやま
と見えならむの哥は意は夕暮のまかき山とみえよかし夜こえし
とて留ル計ト読ル也　山にのほりとは比叡の山也人々とは山法師
ともなり　幽仙律師トは天台座主也懸継大臣ノ孫宗通也
大納言ノ子也藤氏の人也わかれをはの哥に花のまに〳〵とは花
のまゝと云義也花の人を留ルト云本文有大平御読云無シテ宮
染レ身ニ芳女ノ懐無ヲ心留レハ人美花ノ色文文集云遠林ノ艶花ハ何

」8オ

天台座主
花のまに〳〵
花の人留る事

」8ウ

物ヲ是留ニ人ノ心ニ近苑金囀何物ヲ是知　暮情ヲ書々金囀は
鶯ノ異名也長能此意を読て云　心なき花にも留る我
身かな行みはつへき春ならなくに此意を読り
雲林院のみことは常康ノ親王也舎利会とは年ことに二月十
五日にひえにて舎利会を行ヲ山風の哥に君とまるべく
とは君とは常康親王也　春にならはの哥義同レ上こへすは花
のうきにやはあらぬとは此人をかへすは花のなこり惜てなき
にこそあれと云也　仁和の御門同レ上ふるの瀧は大和ニ有兼芸法
師ハ東大寺法師也藤原ノ古之か男御門のふるの瀧の御幸の
時召供せられて御門京へ帰り給ける御なこりを惜みて読る
哥也　あかすしての哥無義　神嶋ノ坪同レ上　おほみき
同レ上哥に秋萩とは酒の異名也哥の意は此酒を雨にぬら
すとも君のぬるゝをはましておしと云也　ましてはまさる
の義也　此君とは延喜の御門也酒を秋萩と云事孔子酒興集
云忘ニルハ酒ノ憤ヲ萩花の薬文　文の意は周ノ穆王の御時天竺ヨリ酒を唐
に渡せり是を飲ム人酔テ過ぬれは忽に死ぬ此事を天竺へ問
たりけれは萩花をもみて入て飲シテハえはすと云如此する
に実にえはす御酒を萩花と云　兼覧ノ王ハ惟高親王
の御子也　おしむらむの哥にふりにけるとは身の老ひたる
義也　兼覧の王とは彼時御座も坐す人也　わかるとのうた
無義　あかずしての哥は貫之延喜ノ姫宮に忍ひて始て
合奉りける時読る哥也　並三首也　あかすしての哥に
袖の白玉とは涙を云也　かきりなくの哥にそほつとは

山の舎利会

ふるの瀧
六葉
おほみき
秋萩は
　酒の異名
まして

」9オ

袖の白玉

」9ウ

そほちぬる
ここはふらなん
ぬれきぬ

ぬるゝ義也哥無義　かきくらしことはふらなむとは〇いひふらさむと云義也たとへは君かなき名はたゝはたて合奉ルト云ヒぬらさむと云也　ぬれきぬとはそらことを云也日本記云丹後ノ佐千男ト云人筑前ノ守ニテ下ル京ヨリ具シタル妻彼ノ国にて死にぬ彼ノ国ノ人の娘を妻トス父にむすめ有今の妻に娘有父の娘〻みめかたちもよかりけれは別たる妻の形見と思ひて父是をかしつく継母我娘をかしつかさる事をねたく思ひて海人ヲ語云汝チ払暁ニ来て云へき様は是ノ京の娘御前の夜に我もとにかよひ給つるかぬれたるつりきぬを次て坐スたへと云て種々の宝をとらせて衣をこひ取て彼娘のね入たりけるにうちきせて置ク海人約束のことく来て高声に申す父是を聞て行テ見るにぬれ衣ひきかづきてねたり軈てころしぬ後三年有て彼娘父か夢に見て云ぬきゝするそのたはかりのぬれ衣はなかきなき名のためしなりけり　ぬれきぬの袖よりつたふ涙こそなき名を流すためしなりけれ　此哥二首万葉ニ入レり父夢さめて彼妻を送り出家遁世しぬ松浦ノ上人是也　しゐて行クの哥は行平の中納言鷲尾にすみける時忠仁公の末大納言ノ御時座したりけるか軈て帰り給ひけるに読る哥也哥無義　志賀の山こえにて別るゝ人とは平ノ定文か尾張国へ〇りける道りに志賀迄行て読る也哥にむすふてのしくに濁る山の井とは山の井は木葉散つもる故にちり多キ物也すこしも水を動せはにこる也故にこることと浅きことに読也あかてもとは閼伽の水によそ

詞ハ

10オ

夢中の歌

山の井

10ウ

下の帯
下ひも

へて読るなり是は万葉に人丸の哥読給　結手野石間於（ムスフテノイシマヲ）
挟見深山野岩垣清水不飽毛有哉（セハミヨクヤマノイワカキシミツアカスモアルカナ）　此哥の意をよめり
みちにあへる人とは染殿の内侍也哥に下のおひのみちはか
たかたといへりしたのおひのゆきめくりとは帯はひきまはし
て後にて別れたれとも前にてあふか如くにめくりてはあ　」11オ
はむと読り帯を契ト云事本又有又下ひもと云も是也文集云
契帯有テ方見（カタミ）後自ノ思ニ肘皮（チウヒ）残レ家ニ待ニ南風一といへり文意は漢ノ代
に籍胡（サウコ）云者天下一ノ美女を妻ト王是を聞召て女御ニし給はむと
す夫婦互に悲テ別レやらす男妻ニ相て云ヲ宣旨不及力汝参る
へし汝ニ別レなは七日か内に死ぬへしとて肘（ウテ）ノ皮をはきて帯につゝ
みて是をとらせて云是を汝はたにして午（ムマ）ノ時はかり南
殿に出ヨ我南の風と成て午の時ことに吹来て汝ニふれむ其
時帯とけは我に相とおもへとて別れぬ約束たかへす是よりして
人に契りぬるをはした帯下紐を結なむと云故に相をは
下ひものとくると云也又日本記ニ契を帯と云事有是は　」11ウ
鹿島大明神火多良命に始テ契り給ひし時おひを契のた
のめに奉ル其よりして上古は男女の契には帯を遣るあわ
しと思へはたゝ返し男にせんとおもへは帯を留ム義致あは
むと思へは其数を給ひて返す也是は上古より文字なかりし　」12オ
時の事也されは此等の因縁をもつて契（チキリ）を下紐とも下張
帯とも云也　」12ウ
（約六行分余白）
（一丁分余白）

古今和歌集巻第九　　○羇旅歌

安倍仲磨ハは安倍ノ中務少輔船守一男于時宮内卿也唐ッにて
月をみて読るとは淳和御時遣唐使に行たりし時の事也あま
の原ハは天の名なりふりさけみれはとは遙に見る心なり
もろこしにあまたの年とは三年唐に居て白楽天ノ九代ノ
弟壮甘サウカント云人に付て物習ひし時の事也　又使ニ罷り
至りけるにとは嵯峨天皇の御時右大弁ノ宰相藤原常継を
遣唐使につかはれたりける時常継か帰朝しけるに唐ノ人
あまた明州ノ宀海ノ津まて送りけるに仲丸も送り来て
日本の方の月をみて読ると云々仲丸帰朝ノ後出家して
大和国多武峯に籠れり法名尊運と云隠岐国になか
されけるとは篁三ノ無実あて流さる一には内裏ニ無悪
善ト云落書を嵯峨天皇ノ御時書り人是をよます篁是
を読て云クさかなくはよからむと読たり君を呪詛し
奉るとて罪せられむとす篁か申さく我誤まらす才ノ所レ致
なりと申すさらはとて御門中原ノ総世ト云フ時ノ学生を
召て何ナル事を申て篁か心見との給フ総世斗テ一首の哥を真
字に作て出す其哥ニ云　一伏三仰不来待画降雨慕渉
霞臥ト書て出せり篁是を読テ云ク　月夜にはこぬ君ま
たるかきくもり雨もふらなむ恋つゝもねんかく読たり
多才の所致也とて罪せられす二ニハ次ノ年同シ内裏ニ南殿ニ赤キ
札ニ木目西心公滅期ト書て撰たり篁召て読するに読テ云
悪相公滅期ト読り是も汝か所行也とて罪せられむとす

13オ

13ウ

すくさぬ由を陳ゞ申す又総世に仰て文字を作りて読す
子文字を十二書て遣ゝせり篁読テ云子子子子子子子子子子子子子読たりけれは又才覚の所レ致なりとて許　三ニハ嵯峨
第六ノ姫宮立子内親王ヲ犯奉ルト云ヲ無実有テ隠岐国へ流ル
時宮内少輔也小野峯守か一男是等は藤原永手ノ卿篁を
そねみてかゝる事をし給けりと云々其後三年を経て可然又
者なかりけれは藤原ノ真丸卿ノ申ゆるして召返すといへり
哥に云　わたの原とは大海の名也又は河尻のおきをも云とも
いへり今此哥の心は大海を云と見えたり万葉云
淡路山八嶋懸天見渡波浪持由陪流渡原哉といへり　」14オ
日本の名也八嶋かけて漕出ぬと人にはつけよとはかく流さる
れとも八嶋をかけて行けは他州へ行にはあらす心易く
思へと云心也隠岐国は八嶋の其一なれは都出ての哥に
いつみ河みかの原かせ山一所に有山城国也此哥は神亀元
年に聖武天皇伊勢太神宮行幸ノ時かせ山に留て読給た
りける哥也　武蔵国と下総国との中にと云事伊勢物語の
ことし北へ行雁そ鳴なるの哥は有常甲斐守にて有し
時滋春ノ少将は有常ノ孫なりされは祖父許へ夫好共に行
たりけるか滋春甲斐国にて死ぬ昌泰二年二月也生年
四十九滋春か妻は西三条左大臣良相ノ娘也男にをくれて京へ
上りけるに美濃国なりける所にて帰る雁の鳴を聞て
読といへり　東の方より京へまうてくるとは乙かする
かより上りける時の事也彼乙ト丶は壬生ノ忠氏か孫宮内丞益　」14ウ

二葉

三葉

成か娘也駿河守中原仲康妻なり哥は別義なし益成(マシナリ)と
家隆題也　こしの国へまかりけるとは延喜ノ御時躬恒越前
押領使を給りて下りける時白山を見て読たりける時の
哥也哥に義なし　あつまへまかりけるとは貫之常陸へ
下りける時也延喜の御時也哥にいとによるとは心ほそく
と云事をいはむか為也　甲斐国へ下りけるとは躬恒甲斐ノ
目代にて下りける時也是も延喜の御時也哥に草枕の
事如上一あまた旅ねぬとはあまたたひねするを云也
但馬国の湯へとはかつま田の湯也　ふたみの浦とは播磨ニ有
ともに有ける人とは兼茂素性等也哥にゆふつくよとは
夕への義也夕ニ付夜とも書夕月夜とも書也　玉くし
けとはあけてといはむか為也　惟高の御子の事伊勢
物語の如シ哥も同シ返事も同し伊勢物語に
は古今ニ譲ル古今には又此事なし可尋ニ朱雀院の
奈良に御座すとは延喜二年の秋の春日の御幸
なり手向山とは春日山に有菅原朝臣北野ノ天神
也哥にぬさと云は上に云かことし
同し御時御供にて素性か読たる哥也哥に云
つつりとは法服の袈裟也此哥の意は神の手向に
は我着たるつゝりの袖をも切て奉るへきに
天神の紅葉をぬさに奉りたれはもみちにあき
て袖をは返し給はむすらむと読る也哥に切り
てと読へきなり

いとによる
あまたたひねぬ
夕付夜
夕月夜

15オ

15ウ

（約二行分余白）

古今和歌集巻第十　　○物名

隠ッ題（うくひす）　うくひすとは花のしつくにぬれてうくひすと云意也

そほつとはぬるゝ義也　くへきほとの哥は郭公をかくせり

同作者也　浪のうつの哥はうつせみをかくせり浪のうつせ

みれは玉そくたけくるとは水のあは也返事　たもとより

の哥にうつせみむとは同上空蟬の義也　うめの哥にあ

なうめにとは　悲（カナシミノメ）　目ト書り長房カ春秋ノ記ニ云縦レ雖為ト天仙之身（ミ）

不出ニ有為之里ヲ日夜遇ニ悲目一　　日本記云　悲目尓人毛（アナウメニヒトモ）

恨紫己高峯野峯余里奥尓庵治牟　　此哥は履中

天皇ノいまた位につき給はさりし時母（ハハ）ノ后情ヶなくあたり

給ひけるを恨て彼山に閉籠らんとて読給て出給

けるを臣下留ッ奉ッ位に即奉りける也己高峯は近

江に有　あなうめの哥につねなるへくもみへぬとは無常の意也

此哥は染殿の后の御哥也　香（カハ）にほひつゝかにはさくらとは

口伝アリかつけとも浪の中にはさくられてとはかには桜を籠

て読る也うきしつむ国（玉イニ）とはあは也　今いくかの哥に

うくひすもものはなかめてとは李（スモ）ノ花をかくして読り

あふからもの哥別の義なし　からもゝの花をかくせり

たちはな小野滋陰ト干時佐渡守也美作守清樹か二男

也哥にあしひきの義如上無別義　をかたまの木の義

口伝有可レ見レ注ッ　哥にあはをかたまのとはあはの国也

あはをのをの文字はやすめ字也あはか国のきゆと云也

あなうめ　└16オ

うきしつむ玉

二葉

あわをかたま　└16ウ

山かきの木の哥にあきはきぬとは秋の来る義也此哥は兼
覧ノ王ノ御哥也　かくはかりの哥はあふひかつらをかくして
読ル也此哥は貫之か哥也あふひ草也人目ゆへの哥無義
同作者也　くたに口伝有哥に散ぬれはのちはあくたにの
哥にまとふてうかなとは蝶也　さうひトは薔薇なり
うひにそみつるとは初の義也　をみなへし　白露をの哥に
玉にぬくとやとは貫く義也　朝露の哥に野山トは野と
山と云義也みな経知ぬると哥に有　朱雀院のをみなへし
合は延喜七年の秋也哥に三年たちならしとは三年
のなるほとに鳴と云義也此哥は折句なり折句トは句の上に
物の名を一字つゝをく也　きちかうの花トは桔梗
なり哥に無義此桔梗は草も木もの相輪有といへと
も多分草の義也　しをにとは紫薗也哥にふりはへ
てとは袖のふりはへてと云義也哥にふるさとゝは
奈良の京也此哥は橘の清友の哥也　りうたむの花とは
りむたうの花也哥に我やとの花ふみしたくとはふみ
靡かす義也おはな有とみての哥は国経ノ大納言ノ哥なり
世をはなしとははかなき世をはなしとこそ思へと云也
けにこしトは口伝有矢田部の名実トは丹波守利久か一
男于時左衛門志也哥にうちつけトは如云上ニこしとやとは
色こいうすいのこいと云義也　春宮のみやす所如上
めととは花ノ瓶也哥にふりにし木の実なる時もかなとは
我身をこのみにたとへてよくなる時もかなと云意也

てふ
三葉
うひにそ
たちならし
ふりはへて
ふみしたく
こしとや
めと
四葉

17オ

17ウ

玉の行ゑ
魂

物わひしら

五葉
いさゝめに
心はせをは

しのふ草哥に無義　やましとは口伝有哥に無義
からはきゝは唐萩也哥にたまのゆくえを見ぬそかなし
きゝは魂のゆくゑをみぬゝ云義也此哥は伊勢か哥也
かはな草口伝有哥に無義うは玉如レ之
さかりこけゝは口伝有高向利春ゝは小野美樹二
男延喜ノ御時始て雅楽所ノ別当となる彼別当は高向氏
の人より外はせす彼氏の人たえたるに依て利春姓を
改て高向氏と称す于時雅楽ノ頭也哥に無義但かへすか
へすと可読也　こけれともは色のこい義也　にかたけ哥
にものわひしらにとは物わひしうと云義也　かはたけ
景式大君ゝは平城天皇ノ御孫惟條親王ノ御子也哥に無義
わらひ真静法師平元規か一男也哥に無義　さゝ松ひ
は　はせをは　紀乳母ゝは　陽成院の御めのと三河守
紀元助か娘也　哥にいさゝめにとは早目と書りはやきめ
の心也　時まつにとは時の程を待まに日経ぬると云意也
心はせをは心せはき事也　古撰伝　吹風於厭賀薗野
鶯野草目尓見留我厭鳴　万葉云　早目尓相見留哉
小倉崎小嶋隠野海人賀躰於　なし　なつめ　くるみ
兵衛ゝは国経大納言娘忠房ノ中将の妻也哥無義但うき事にと
読へき也　からことゝは伊勢名張ノ郡なる所にて常による〳〵
箏ひく音しけるに聞にたくひなし国司あやしみて夜ゝね
らひて見るにうつくしき天女あまくたりてひく人をみ付て
琴をは埋て河の中へとひ入て夫婦此琴を神と祝ひて

└18オ

└18ウ

唐琴の明神といへり此琴近き比まで人ひかねとも時々鳴と
いへり　春立ける日とは元慶三年也哥に春のしらへとは雙
調也是は調子を四季に配する時双調は春に留る也
いかゝさきトは三河ノ伊羅胡崎也是鹿島大明神ノ太神宮ノ
御殿居に伊勢へのほり給か渡りの彼風あらき故にかしこ
に宮を作りて住給所也歌にいかゝさきちると云り
又かちにあたるとは船の檝に当ると云義也別無義
からさきトは津国よとにありかしこは神功皇后異国ヲ責テ
置て暫くやすみ給し所也唐人共のあまた居たりしに
依てからさきと云也阿保ノ経観トは于時日向守丹波守
守平か一男哥にかのかたとはかしこの方と云義也かしこのかた
のからさきにいつきつらうと云義也　波の花の哥に義ナシ
かみやかはとは神ノ宮河と書り伊勢太神宮の哥に有是は
天照大神のあまくたり御座ける時白鷺と化して飛
給ひける御影のうつりたりけるを大仲臣ノ意美丸
見付ケ奉りて河中に宮を作り暫くすへ奉に依て神宮
河と云今うつして里宮と云是也大神宮の下宮河は向ひな
り哥に義なし　よと河トは綏清天皇ノ御時宮作りて
すみ給ひし所也歌無義　かたの　河内ニ有是真如親王ノ
宮作てすみ給し所也此親王をは高岳ノ親王と云間片野ノ
高岳宮とも云也哥に無義但沼と云へきなり　かつらの宮とは
西山に有是は淳和ノ宮の御時すみ給ひける所也　源忠トは
于時縫殿ノ頭也少将弼か二男なり哥に　秋くれは月のかつら

かのかたに

六葉

19オ

19ウ

なかしかよひち
をき火

のみやはなるとは実にもならし光りは花と散ともと云心也　百。
和香ハ百草薬なり是は百。かうはしき草を集て薬なり哥
に無義此哥は染殿の后の哥也　すみなかしトは墨流(スミナガシ)也
哥になかはしかよひちとは春かすみのなかきかよひちたになく
は秋くる雁はよも帰らしと云義也　をき火トは
のし(熨)の火也　都良香(ミヤコノヨシカ)トは于時文章博士本名言道(トキミチ)
中納言定光か孫文章博士貞継か一男也哥にをきひん
ときやとゐの字を書へけれともをきひをかくして読ム故に
ひの字を用る也　ちまきの哥に無義　ノチマキ
僧正聖宝トは春日ノ親王の御末恒蔭(ツネカケ)ノ王の御子哥也哥は
花の中目飽(ナカメニ)飲屋と読ムへき也　くるみの哥は滋春か歌
也義なし

（約二行分余白）

古今和歌集聞書　　賀　離別　羇旅　物名　凡

（約一行分余白）

は始ニをき　るヲ終リニをきて読也　なかめをかけてとは
はノ字ノ下るノ字ノ上ニなの字ををく也

（約七行分余白）

古今和歌集巻第十一　　○恋歌一

郭公の哥にあやめくさとは菖蒲也是は唐土の詞也天竺ニあ
る女菖蒲の冠をしたりけるか物をねたみて死たりけるか
其ノ冠のくちなうと成レリ天竺ニハくちなうをあやめと云菖
蒲冠のあやめに成たる故に菖蒲をもあやめと云也是を以テ

あやめ

└20オ

└20ウ

└21オ

あやめもしらぬ

唐ニモ菖蒲をあやめと云也此哥ハ長門守橘長成春日ノ御供にまいり
けるに延喜第六王子守平親王其日御幸成ければ公卿あまた共奉な
りけるに公卿殿上人の娘のあまたみめのよきを召て舞をまわせ給け
に長成カ娘ノ殊ニみめよかりけるをおもひかけて読て遣ける哥也
後ニハみやす所とし給けりあやめもしらぬとはよしあしもしら
すと云事也　古撰万葉云　小野山野峯之白雲白雪　」21ウ
之上尓重留不知善悪毛　小野山ヲノヤマノミネノシラクモシラ
の哥は内裏ノ歌合ニ読たり陽成院元慶四年三月三日歌合

あへす

ト云此正義也あへすとははやき義也けぬへしとはきえぬへしと也
吉野河の哥は延喜二年九月八日延喜御門春日へ行幸あり
て千番の歌合につかふまつる哥也無別義白浪の哥は山階右大将
藤原経行ノ娘花山ヨリ花つみて帰りけるを見て恋そめて読て遣ス彼ノ
娘をは崇子と云勝臣は于時阿波権介也越後介落字ナリ生か一男哥に無義
音羽山の哥は朱雀院御時延喜二年四月二〇日春日御方ノ哥合ニ読る哥也并に
せきのこなたとは未タあはぬ義也たちかへりの哥は中原ノ宗行か娘ノ
宇多院の上童ウヘワラハにて右衛門助といひけるを同シ内なりけれはつねに
みて恋はしめて読て遣ス元方か哥也哥に云人に心をきつしら

奥津白浪

浪とは本文ノ意也文集云荒波寄思祖蚩カ恨一ヒ去テ不レ帰二捨テ不レ
問矣文意は祖蚩宣ト云人女をおもひけるか彼女こと男につきてこさ
りけるを恨ておもひに沈みけるか遂に死て後彼女後に祖蚩か墓の
ほとりを通ルニ墓の中より水出て大なる波彼女をうち埋む其より
して心を恨むる事に奥津白波と読也是も宗行か娘の相かたき事
を恨みて読ル也世中はの哥は七条中宮の御孫深子内親王を恋奉て読　」22オ

る哥也此哥に吹風の目にみぬ人とは上の契帯の文意なり
右近馬場ノ日をりの日と云は二義有家隆云北野の祭を云と云り
当流に難して云北野ト云は菅丞相ノ崇廟也彼丞相は延喜の御時人
也業平は清和ノ時ノ人也時代不同如何此義不尓家ノ義云右近ノ馬
場ノ日下ノ日ト内侍所ハ日神ノ御正体也彼を右近ノ陣に下シ奉テ祭レハ」22ウ
日下の日ト云也此時の祭は貞観七年四月十三日也大方は日下の祭ト
は北野祭を云也是祭　したすたれより女のかほのほのかにみゆるとは
染殿の内侍也夢にみすもあらすみもせぬ人とは簾にすきてみゆれは
少〻みたりうるはしくは不見と云事也あやなくはえきなきと云意也
返事の意しるしらすはきて云へきにあらすおもひをしるへにてあわん
と云意也此二首の哥に深義有　かすかのまつりとは延喜御時延喜三年
三月三日御祭の時の勅使に右大将定国六位ノ進にて有し時彼ノ勅使
を給ていきしに忠峯大将の其にて有しか貫之娘助の内侍か物
みてありしをみて読て遣す也哥に無義此哥の返事貫之か家ノ
集に有哥に云　春日野の雪まの原のはつかにもみへけむ君を
われもわすれし　花つみしける人とは宗岡の大定カ
娘をみてよめる也哥ニ見てしと声を読へき也哥に無義」23オ
たよりもの哥は昌泰三年八月十三日内裏の哥合ニ読ル哥也哥に心を
人につくるなりけりとは本文ノ意也政經云隔テ雲ヘタテ阻レ波ヲ身雖有二他州一
就レ君ニ心不去其家ヲ文此文意は呉王越王ノ軍ノ時越ノ臣下呉王にとられて
呉国に栖けるか最愛の子越国ニ有けるかもとへたよりに付て書を
遣ス文の詞也此文の意ヲ読ル也はつかりの哥は寛平九年三月三日の哥合に
よめる哥也哥無義あふことはの哥は延喜元年七月十二日に法輪ニ大法会ノ

あやなく
二葉

玉の緒
雲のはたて

三葉
かりこも

ねたく
ゆふたすき

思をそらに
みつ

有時源ノ有光ノ少将ノ娘物見テ有けるをみ初て読て遣す哥也おりし
もかみのなりける時といへり返哥家の集に有　かたいとの哥は染殿
の后始て文徳ノ女御にまいりて内裏にまし〳〵けるを文徳ノ第
三ノ御子仏世ノ王子思ひかけ奉て読給哥也玉のをとは命也こゝには
念珠のををいのちになそらへて云なせる也　夕暮の哥に雲の
はたてとは二義有一ニハくもの糸すかくを云ければおるはたに似たる義也
二ニハ雲のはたてと云はうき雲のみたれたるは幡ノ手に似たりと云其を
おもひみたれたる恋になそらへて読ル也此哥は四条の后の未タ后
ともならて坐しける時ほのかにみえ給ひけるを滋春みて恋奉り
て読ル哥也　かりこもとはかりたるこも也人しつけすはとよむ
此哥は延喜三年七月十一日内裏の哥合に読給へる延喜の御哥也
一つれもなくの哥は七条の中宮の御哥合に中宮ノ御哥也ねたくとは
ねたき義也ちはやふるとは如上一ゆふたすきとは二義有一ニハかけをも云
二ニハ神供なんとをして奉る時するたすきを云也ゆふ付る間
ゆふたすきと云也かくる事に読なり此哥は賀茂ノ神主
行春の大夫か娘に読て遣す良門か哥也　我恋の哥にむなしき
空にみちぬらしとは日本記ニ有本文の意也是は秦ノ用世（モチヨ）ト云も
の我より上なる人を思ひかけて切に思ひければ身こかれて
山の中に行てあをのけにねていきをつきければ気キ雲とな
りて空ニ入ルル其心ヲ以テ思ヒヲハ虚キ空ニ満ツト云也此意を保道記ニ引テ読ル
哥アリ其哥ニ云　おもひあまり我つく息は空に入て君かあたりの雲と
なりなん此哥の意を引テ読ル哥也今此哥は三条ノ右大臣藤原良行か
家の哥合に読る哥也　するかなるたこの浦波とはいつとなく浪高

23ウ

24オ

き所也二条の后を恋奉て読給昭宣公の御哥也二条の后は娘也　夕
つくよの哥に松のはのいつともわかぬとは松かはらぬを以テ替ぬおもひにたとへ
て読り此哥は七条の中宮の家の御哥合寛平六年十月一日ニし給へりしに　」24ウ
中宮の読給哥也　足曳の哥は染殿の内侍を恋て平定文か読ル
哥也哥ニたきつ心とははやくきたる心也　吉野河ノ哥にいはきり
たきつ心
とをし行水とはとははやき心を読ル也此哥は清和の未タ春宮の御
時嵯峨野に狩ニ出給けるをみ奉て恋て読給二条の后未后
ともなり給はて有し時よみ給ふ哥也　滝津瀬の哥は業平か
いもうとの初草を恋て藤原ノ敏行か読ル哥也よとはよとむ義也
山たかみの哥は延喜第七の姫宮をほのかにみ奉りて読て奉る貫之か
哥也哥になかれてこひむとはなからへこひんと云義也　おもひ出るの哥
なかれて
にときはの山と云に二義有一ニハ名所の常葉山二ニハ野山ノ義也彼の義正義也
常葉山
岩つゝしいはねはそあれ恋しき物と云は万葉注ニ云昔天竺に有ける
人師子を養ける程に彼師子を深くいとをしかりける彼師子のこ有
其母死たりけれは其子深く歎きてふしまろひ悲てなき死ぬ　」25オ
其死たりける跡より岩つゝし生タリ主つねに是をみて此師子
の事おもひ出て歎きけり其よりしておもひ出る事ニハ岩つゝしを
読りふしまろひなけきたりしによりて躑躅トかけり此哥は九条右丞
相師輔ノ第十二ノ御時橘光少将をさなくより淳和王子に雅仁ノ親王つかう
まつり給ひしかおくれ給ひて十七にて出家して法名如覚ト云多武峯
に住給けり彼娘ノ十斗なるかもとより父ノ許へ送りける文の哥ニ云恋
しやと思へは君かわすられて夢にも君かわすられはこそ此哥の返事ニ
読て娘の許へ遣ス哥也　人しれすの哥にくれなゐのすえ
末つむ花

草の男女
尾花かもと
のおもひ草

梅のほつえ
いねかて

みたらし川

つかねを

つむ花とは紅の花のすゑつめはいよ〳〵色こくなるされ
は深くなるおもひに読る也　此哥は延喜四年八月十
一日哥合ニよみ給ふ貞信公ノ御哥也　秋の野の尾花にましりさく
花とは是はをみなへしを云り草に男女を付るにすゝきをは草
の夫といひ女郎花をは女と云すゝきあまたの中に女郎花咲まし
りたるは男あまた有ておもひあるらんとて尾花か許のあもひ草と
云此哥は橘の清友か娘を恋て読給惟高親王ノ御哥也　わかそのゝ
歌に梅のほつえは梅の木すゑ也　延喜の御時延喜三年九月に八幡
にて千番の哥合の有し時忠峯か読る哥也　あしひきの哥にいね
かてとはいね難キ也此哥は延喜七宮を恋奉て貫之か読る也
夏なれはの哥は経行大将住吉ニ籠て居たりし時彼大将をほの
かにみておもひに沈みて読て遣ス住吉ノ神主宣基カ娘ノ哥
也終にあはて死たりといへり哥にかやり火と読へき也
恋せしとみたらし河の哥は二条の后の御事すそろに思はれて身
はほろひぬへかりしかは業平賀茂ノ河原に行て吉備の大明ト云
陰陽師を招て恋せしと云祭をしけれともいとゝいとゝ恋しさま
さりけれは読て后キに奉る哥也哥にみたらし河トは御手洗河と書り
此みたらし川は賀茂ノ社にも限らす万の神の御前の川をは皆みたらし
川と云也是は神の御手をあらひ給ふに依て諸ノ社ニわたる也長能記
云捧ニ御手洗河幣頭ス神モ不レ受ケ理ヲ一といへりみそきとは祭也
あはれてふことたになくはトは君かあはれと云事たにもなくは
みたれたる恋はやましと云りつかねをとは物を結緒なれ
は其ことくに君かあはれと云を緒にして思みたれたる

」25ウ

」26オ

しきたへの枕

あさちふ

四葉

恋をやめんと云也此哥は寛平九年七月七日の哥合に
助内侍の哥也　おもふにはの哥は基経ノ卿を恋て貫之か娘
の読る也哥無義　我恋の哥に敷妙（シキタヘ）とは枕也此哥は寛平六年
十二月十二日哥合に宇多院の御哥也　あさちふの哥にあさちふとは
朝の路とも書り又は麻茅生（アサチフフル）とも書り小野のしの原近江に有此哥は
延喜三年三月三日に昭宣公老後ノ時御八幡へまいり給たりけるをみ
奉て恋て読て奉る定国ノ大将ノ娘の哥也　人しれぬの哥に
あしかきのまちかきと云事日本記云融ノ大臣津国ノ小屋ニ家作て
住給ひける時大伴ノ家持家をならへて住けるに彼娘を思ひかけ
ての給ひけりともきかさりけれは融ノ大臣ノ哥に云津の
国の小屋といへとも君こぬはまちかきかひもなきか
あしかき此哥の意を取て読りまちかきとはあしかきを
かこひたるは繁くてひまちかきを云也間近キト書り今の
人しれすの哥は行平をこひて伊勢かよめる哥也思ふ共の哥に
ゆふてもたゆくとくるしたひもとは契レハはなれ〳〵する恋を云也
あわんものなれやとは思ふとも恋ともえあふまじき物なれと云
意也問本文のことくはあふを下ひものとくるといへり今此義不
然如何　答云万葉云　相波希留君賀下張之解之後曽
恨辺良奈留（ウラミヘラナル）トいへり此哥の意は別るゝを下ひものとくると云り
今のゆふ手もたゆくの哥は助内侍を恋て躬恒かよめる
哥也　いてわれをの哥にゆたのたゆたとは舟の中にた
まりたる湯なりやるかたもなき思によめり顕昭は
海の浪の舟ニせかれてわき返ルヲゆたのたゆたといへり

」26ウ

」27オ

」27ウ

うきぬなは
釣するうけ
たくなは

いてわれをとは普通ニ人いてなと云事也古撰万葉云大船ノ猶ノ
予尓袖潤天汲毛不尽波寄留賀毛トいへり此哥意は舟ノ中
の湯ト見又万葉云我心猶予尓浮草辺丹毛澳丹毛寄野
賀祢摩之此哥の心はたゝ舟にゆらるゝ海の浪を云也うき
ぬなはとはうきくさを云也今のいてわれはの哥は小野小町を恋
て平の中興か読ル哥也　いせの海の歌につりするうけとは二の差別
有一ニつり糸の中に付たるうけ也二ニ桶のはたのめくりに釣いとを
あまた付て釣針にえをさして海にひつる也此桶をうけと云
此糸をたく　はとは云也たくなはとは釣するとて舟に大
をたく故にたくなはと云也此哥は五条后の西山に住給
ひし時仁明天皇崩御なりけれは京へもさし出給はて
籠り居給ひける時彼后のをひ忠仁公未タわかく坐シける時姉
をなくさめ奉らんとて常にまいり給ひけるか忍ひ〳〵に
あひ奉リシ時をはにて御座せはあはしと思時も有また恋しけれ
はあはむとおもふ時も有故に意ひとつをさためかねたりと読
給也五条の后とは冬嗣の御娘順子也いせのうみのあまのつり
なはの哥は元良親王御娘を恋奉て読給り貞元の親王御
哥也哥無義　涙川なに水上の哥は遍昭僧正人々に千首の哥
すゝめし時陽成院のあそはす御哥也　たねしあれはの
哥にこひをしこひはとはわれを恋る人をこひむにはあ
はさらめやと云義也　此哥は斎衡三年六月六日哥合に
忠仁公の御哥也　あさな〳〵の哥にうきて物おもふとは
あくかるゝ義也此哥は観修寺ノ内大臣高藤の孫侍従国茂後ニハ名

」28オ

」28ウ

改メテ右大臣定方也播磨のかく河にすみ給ひける時道とをる女をみて
すそろに恋しかりけれは読給哥也　忘るゝの哥にあしたつ
のおもひみたれとは大方つるの恋をするにはあらす日本記云日本
武尊后物気に取れて死に給ひたりける後ふかく歎給ひ鳴給ひ
けれは時の臣下み奉てなき悲しみけり此意を以てあしたつのおもひ
みたれてなくと云事を読り古撰万葉云此事を赤人読テ云　末開野
思乱天空丹而己鳴古曽渡礼葦鶴之音空尓乱天トいへり
今のわすらるゝの哥は良峯の安世ノ大納言の娘を恋て読給
常康親王の御哥也　から衣の哥は大中臣輔道か娘を恋て
よめる橘ノ長盛か哥也哥無義　よひ〳〵の哥は延喜二年
九月の哥合延喜御哥也　恋しきにの哥は同シ時の御哥合に紀ノ
利貞か哥也哥無義人のみもならはしものを哥は延喜三年四月
十八日哥合橘ノ忠幹か哥也　忍ふれはの哥は大江千里越前国
に住ける時藤原長朝の娘の京に住けるに読て遣ス哥也
こむよにもの哥は此事すきてはや昔にもなれかし昔ッさりし
と思はむと読ル也此哥は惟高ノ親王御遁世の後彼御娘仁和寺ニ御
座けるを申給ひけれともきゝ給はさりけれは読て奉り給昭宣公の御
哥也つれもなきの哥は陽成院春日の十首の哥あそはしける時ノ御
哥也　行水にかすかくよりもはかなきと云事日本記云清寧天皇
の御時丹後惟尾小于尾カ我よりまさりたる人をおもひかけて兎
角申けれは女の云我に志ッあらは前なる河に夜ことに数をかけ
百ニ満シたらむ時あはむと云かなはしといはむとすれは事きれ
ぬへき問さらはとて行テかけとも数なしさて女いさ数みむとて

行水に数かく

」29オ

」29ウ

男ト つれて行てみるに数なし女数のなけれはあはしとて
帰ル時ノ男云ク　さりともと数かく水は跡もなし君かつらさはつらさのみ
してと云て河に身をなけて死ぬ其よりしてはかなき恋ニハ
行水に数かくと読也此行水に数かくの哥は小野小町か業平を
恨テ読ル哥也人を思ふの哥は枇杷ノ左大臣仲平ノ御娘を恋奉て読ル
紀文幹か哥也　思やるの哥に夢路にあふ人しなきとは夢にもみ
へぬを云也此哥は忠仁公を恋奉て読ル伊勢か哥也　恋しねとする
わさならしの哥によるはすからとは夜もすから也文選恋賦云ク
漢武未レ忘二李夫人後一日ヲ遇テ夢ニ増レ懐ヒヲ見テ江ニ催レス恨ヲ依レカ何ニ止メン死己ヲ文
此文の意也此哥は業平かうとくなるを恨テ二条后の読給御哥也
涙河の哥は大仲臣頼基か娘を恋て読ル平の中興か哥也恋す
れはの哥は貞観六年八月十一日の内裏の哥会に菅原ノ清公の
読る哥也哥無義　かゝり火の哥は別の義なし延域二年
九月十八日内裏ノ哥合也橘ノ長盛か哥也かゝり火のかけとな
る身の哥は師輔を恋奉て助内侍ノ読ル哥也融卿ノ娘也哥無
義　はやき瀬にの哥は八番の百番の哥合惟高親王ノ御哥也哥ニ無義
みるめとは海の草也おきへにもの哥は奥ノ辺也此哥は光孝
天皇を恋奉〇て読ル伊勢か哥也たまもとは海に有もくつ也あし
かもの哥は良門か娘を恋て有常か読ル哥也可見注　人しれぬの哥は忠
峯賀茂の百番の哥すゝめける時忠峯か読ル哥也
とふ鳥の哥は四条の后を恋て在原ノ仲平か読ル哥也哥無義
あふさかのゆふつけ鳥の哥は七条ノ中宮未ダ后とも成給はて御座
し時ほのかにみ付て読玉ヲ宇多院ノ御哥也　あふかさの関の哥は陽成院

五葉
よるはすからに

」30オ

おきへ
玉も

」30ウ

の御門陽成の御をとゝ貞国親王兄をうち奉て代をとらむと
し給し事あらはれて出雲国に流し給けれは御子達ちり〳〵に成給
ひし時第二の御娘時ノ美女也彼を基康親王奉レ見て深く恋て
読て遣ス哥也彼相坂の岩清水の深き思ひによすへて読ム事
は由緒あり是は成務天皇ノ御時秦ノ良見ト云者ノ娘男ヲ恨テ身
をなけたりし水也故に恨深キ事に云也　うきくさの哥は同シ
人を恋テ同人ノよめる也　打侘ての哥に山ひこのこたへぬ山は
あらしと云事は続日本記ノ注云昔ヅ下女有てみちの国ノあいそ山ヲ
夫婦共に越けるに先ニ立タル男谷水くみに行たりけるか帰らす妻彼
をよふとておめきありきけれは山たまのことふるを聞て男の有
とおもひてあちこち尋ね行けれともあはす其意を引テ読ル哥也
深養父か家の哥合ニ此哥はよめり藤原公俊か哥也　心かへの哥に心かへ
とは心かはりしかた恋とは共におもわぬ恋也此哥は文徳天皇の御時斎衡
二年ノ内裏ノ哥合に読ル昭宣公の御哥也　よそにしての哥にいれひも
といへるは普通のひたゝれのひも也此哥は西三条の左大臣良相ノ娘を恋テ
読ル行平中ノ納言ノ哥也後ニハ妻とす　春たてはの哥は延喜五月四月十三日
内裏ノ哥合ニ延喜御哥也哥無義　あけたてはの哥にあけたては
とは夜ルの明はなれたる義也せみのおりはへとはおりをえてと云心也此意は
源氏の序に見えたり文集云恋コトハ似ニ樹ノ蟬ニ終レ日ニ鳴キ恨コトハ如シ野蛍ノ終レ夜ヲ燃ト書リ」31ウ
此意をよめる哥也此意は延喜元年ニ内裏ノ哥合に延喜御哥也
夏虫の哥に　夏虫の身をいたつらになすと云事は長能記中云　不レ及
恋ニ焦トハ身ヲ如レ望ニ夏ノ虫灯ニいへり　是は玉虫は虫の中ノ女にて有を萬の虫ノ
おもひかけて霞といへはくらきに火を取てこよと云さて萬ノ虫の火を

相坂の
岩清水

山ひこのこたへ
ぬ山はあらし

いれひも

あけたては
せみのおりはへ

玉虫は虫の
女也

」31オ

ゆふされ
春さり
秋さり
をきそはりつゝ
六葉

取に来てやけて死する也此意を読ル哥也此事長能記ノ注に見ヶ
今夏虫の哥は小野小町を恋て大江惟章ヵよめる哥　夕されの哥に
ゆふされはとはゆふさりと云心也春されは秋されは春なれは秋なれ
はと云義也をきそはりつゝ置添ル義也　此哥は寛平四年七月十八日
内裏ノ哥合に藤宰相清経入道か哥也法名蓮寂也　いつとてもの哥に
秋の夕へはあやしかりけりとは秋は物思ふ時なるか故に此ことく云也本文如上此
哥は秦ノ宗冬か娘を恋て橘ノ広道か読ル哥也　秋の田の哥は秋ノ田のほ」32オ
にこそ人を恋さらめとはあらはれてこそ恋さりめと云義也ほに出る
の本文如上―　此哥は輔ノ内侍を恋て藤原ノ仲平ヵ読ル哥也　秋の
田の哥にいなつまのひかりのまにもわれやわするゝと云事は本文
を読り漢書云思不レシテ絶電光ノ間タモ猶有歎恨不レ忘朝露ノ中ニ
悲又不レ留此文の意をよめる哥也此哥は大江ノ千里か家ノ哥合によめる
大江千里ヵ哥也　人めもるの哥は輔ノ内侍か花見つるをみて読テ遣ス
遍昭僧正ノ哥也あやなは無益也　あは雪の哥にたまれはかてにくた
けつゝとはたより歎ヶくたくるを云也此哥は清原ノ房則ヵ娘を恋て
貫之か読ル哥也　おく山の哥にすかのねしのきふる雪
トハすかのねはほそき物にて雪ふれともかくれぬ物也けぬとは」32ウ
きえぬと云心也　此哥は清和御時貞観十八年内裏哥合
に染殿ノ内侍の読ル哥也

あやな
かてに
すかのね
けぬとか

（約二行分余白）

古今和歌集巻第十二　○恋歌二
おもひつゝの哥は業平かれ〳〵なりて後小野小町か読る哥
に三首同人を恋てよめる哥也　うたゝねの哥は無義

七日の衣を
かへしてきる

いとせめての哥に夜ルの衣を返してきると云事文記録云残涙未レ乾レ袖微子カ思焦レ肝越レ山ニ渡テ海ヲ且ク入テ玄験カ室ニ学レ道テ遺恋未タレ尽レ心ニ㚇子有レ恨隔テ郷ヲ越テ河ヲ入陶耀カ室ニ雖レ翻レ衣ノ夢路猶悲ヲ争カ出闕門ニ陪仙宅ニ喩祐恋ノ病ヲ矣　文の意は大宗ノ御時徽子ト云賢者有国王の命依テ他国ノ敵を責に向て軍ノ計コトうすくして負たりけれは勅勘をかふりて遠キ国ニ流ルル其所ヨリも三十余日隔たりたる所ニ方玄験か有しを尋行テ武道をならひて歎を責テ勅勘ユリタリト云㚇子は梁ノ武帝ノ時ノ臣下不賢ニシテ国ヲ乱ルけれは遠キ国ニ流ルル宮ニ止ル妻のあまりに恋しかりけれは是を歎て其所ニ有仙人のすみかに入て此歎を何カせむといひけれは仙人飛て云ク汝カすみ処に陶耀ト云人有術ノ達者也彼ニ可レ学云行て問ニ答テ云悲しき人の事を忘れむと思はゝ彼人に常にかさねて着たらむ衣を返してねて七夕ノ呪を言てねたらは夢につねにみえはあふ心地しておもひあらしと云約束のことくしけれは夢にたかはす此因縁を以テ衣のうらを返テ夢に見るト云闕門とは内裏なり彼を出て仙人ノかもとに行て仙人陶耀カ息を報センとすれは君に仕へていとまなし

」33オ

と云事也又文集云楽天作額ハ隔テ、都ヲ四十ヨリ旧婦レ在亭ニ不レ得レ見トヲ侍テ夢ヲ恋テ契リヲ遠ニ翻ヒルカヘス垢衣ト云り文意ハ楽天湖州ノ竹額と云所に籠居して御座し時ノ彼宝ハ行在内裏に住けれは互に恋しかりけれともあはす楽天深く歎給ひけれは宝紫ノ衣を送りて是を返テ着テねは夢にみむと云約束たかはす此意を長実卿の哥ニ云唐の契のすゑは紫の衣をかへす夢の通ひち此意を読り　秋風の哥は寛平六年九月十一日ニ遍昭か家の哥合によめり哥無義

」33ウ

二葉
袖にたまらぬ白玉
夢のたゞちよくらん

しもついつも寺は一条ニ有人のわさしけるとは惟高親王ノ御子兼覧ノ王天慶六年七月二日卒シ給ひけり御手共六波寺にて百日のわさしける時真静律師導師にて説法にしたりける詞を安部ノ清行か哥に読り哥に袖にたまらぬ白玉とは涙也　返哥にをろかなるの哥無義　寛平の御時の哥合とは寛平六年九月十一日也哥に夢のたゝちとは正しき夢也　住のえの哥同作者同時哥也人目よくらんとは人目のそく義也　我恋はの哥は伊勢か中務を恋てよめり哥に無義　よひのまの哥は延喜四年七月十一日に貫之か家の哥合に読ル哥也哥無義　夕されの哥は助ノ内侍を恋て読り同人の哥也哥無義　我宿の哥は延喜五月四月（同人を恋て読ル哥也同人の哥無義）河のせにの哥は延喜五年四月十三日内裏の哥合に読り哥にみかくれてとは水隠（ミカクレ）てと書り　かきくらしの哥は橘の広道か娘の内裏につかうまつりけるをみて恋て読ル哥也哥無義

└34オ

みかくれて

三葉
みをつくし

君こふるの哥は敏行か娘を恋て読ル哥也哥にみをつくしとは海にたてゝ塩のみちひをしる木なり満時はみしかくなりひる時はなかくなる也それになそらへて身をつくし袖をぬらすことに云也再ヒ三首同し人を恋て同人の読ル也　死ぬる命の哥の意は恋にしなんとする命いくるかと心みむに命いくはかりあへとよめる也わひぬれはの哥に人たのめとはわすれんとすれは夢にみえて人をたのむると云意也　わりなくその哥は業平未タをさなかりける時曼荼羅とて真雅僧正の弟子にて有しか十六ノ年宇治へ師とつれて行たりけるをみて醍（十三ニモアリ）醐ノ空海法橋かみて恋しかりて

└34ウ

読ル哥也恋しきにの哥は延喜四年三月三日紀ノ長谷雄ノ卿娘の
清水へ参りたりけるを見て読て遣ス藤原ノ良相か哥也哥にむな
しきからのなにやのこらんと読へき也　君こふるの哥は延
喜ノ第七ノ姫宮を恋奉て読ル哥也哥に　いろもえなましと可読也」35オ
よとゝもにの哥にみなわなりけりとは水の流ル、すち也哥無義
夢路にもの哥にひちてかはかぬとはぬるゝ義也　此三首は友則か娘
大和とて敦実ノ親王ニつかうまつりけるをみて恋ッかりて読ル哥也
はかなくの哥惟高親王ノ家の哥合によめる哥也哥無義
偽の哥は中原ノ清時か娘を恋て読る哥也哥無義　ねになき
ての哥は橘長盛か娘を恋てよめる哥也　わかことくの哥は八幡ノ
百番ノ哥合ニ読ル哥也　さつき山の哥は延喜六年十月廿六日ノ内
裏の哥合の哥也　但五月山ト（サツキヤマ）は別の名所にはあらす只五月
の比の山を云也　秋きりの哥は助の内侍を恋て読る哥也
哥無義　　虫のことの哥ニ無義延喜三年七月十一日の
哥合に読る哥也　秋なれは山とよむまてと云は山ひゝく」35ウ
まてと云事也此春日の神主行春か娘を恋て大江千里
か読る哥也　秋の野にの哥にちくさにと云はかす〳〵の義也
此哥は延喜二年九月内裏の哥合也ひとりしての哥は紀利貞
か娘の津国なる所にすみけるをみて読て遣ス哥也　人を思の
哥は西三条左大臣良相卿春日へまいり給ひし時深養父をめ
しくす良相ノ御娘円子ト申す姫うつくしかりける人花の本に
立給ひたりけるを深養父ほのかに見奉て恋にしつみたりけ
れはいまはかきりとおもひける時此哥を読て奉りたりける時忍

四葉
五月山
ちくさ

ひてあひ給けるといへり此事委ク八後撰ノ注ニ見タリ　秋風にかき
てすことゝは遍昭かいもうとの八幡に住けるか秋風かを
引キけるを忠峯聞テ読ヲ遣ズまこもかるの哥は延喜六年十
月廿六日内裏ノ哥合によめり　やまとに侍る人に遣ッけるとは
紀淑人大和守にて住ける時彼娘ノ時とかよひけるかおやと
つれてやまとに有けるかもとへ読て遣ス哥也哥無義
やよひはかりとは延喜三年三月なり物の給ひける人とは右
大臣長手の御娘恋ひて常に貫之に物をおほせられし也又人
まかりつゝせうそこ遣スとは中納言朝行ノ忍ひて常にまかり
通ふときゝて貫之読テ遣ス哥也哥に　露ならぬ心を花にをき
てとは人に心ををき奉るを云風ふくことに物おもひつく
とはことおとこ行ときくことに物おもひ付といへり男を風
と云本文又如上ー　露ならぬ心を花にをくと云事史記云ヶ
三皇一朝之籠ハ雖勝世今ハ成テ旧婦ノ跡花蕊之心雖レ非レ露ニ置レク君ニと
書り文意は王昭君は三代の君ノ后たりしかとも戎スニ被レテ取胡国ニ有し
かは自ノたよりにもつてを申す事なし是は花の昔にかはらすといへ
とも君に心ををき奉るといへりされ露の心を花にをくと云は
本説有事也　我恋の哥にくらふ山トハ大和に有まなくとはひま
なく也是は橘忠幹カ娘を恋て読ル也宗岡大頼と云は天智天皇
御末兵部少輔茂行一男于時伊勢守也哥無義此哥は寛平六
年十一月十二日内裏ノ哥合也　たきつせの哥は延喜三年三月
三日内裏ノ哥合也哥無義　よひ〳〵の哥は助内侍を恋て
読ル哥也哥無義　あつまちの哥にさやの中山とは遠江国に有

」36オ

五葉

男を風と云

さやの中山

」36ウ

同人を恋て読ル哥也哥無義　しきたへの枕の哥ノ本文を読ル哥也
漢書云漢武恋ニ己婦ヲ涙常ニ恋テ身ハ沈海中ニ如在小嶋ニいへり此文
意は漢武帝李夫人にわかれ歎給ひし涙如海其意を読り此哥大江
千里か家ノ哥合に読り寛平七年七日の事也　年を過ての
哥は助内侍を恋てよめる哥也よゐの袂とは猶こほりけりと云心は
年をへてきえぬおもひたにもかなしきに又おもひのそひ行かなしさよと
読り　我恋の哥は寛平九月七月七日内裏の哥合也哥無義　紅のふり
出つゝなく涙とはおもひの切に成ぬれは血の涙をなかすを云也　文選云
思積ヲ胸ノ火未消恨ミ余テ紅涙未乾此文の意を読り是は延喜七宮を
恋奉て読り　白玉の哥は同人を恋奉てよめり　夏虫の哥は藤原国茂の
娘を恋てよめる哥也哥無義　風吹はの哥は延喜二年九月内裏の哥合
哥無義月ノ影の哥は遍昭かすゝめける千首の哥の中に読ル哥也哥無義
恋しなはの哥意は恋死にたらは我わるき名はよもたゝし世のつ
ねにかゝる事はなしやさしとそ人はいはんと読ル也たか名ハ我名と云事也
此哥は中原ノ清時か娘を恋て読り此女は後昭宣公基経御子右大臣遠
経の北の方に成けり　津の国の哥にめもはるにとは目もはるかにと云心也此哥
は延喜二年九月十二日哥合也　てもふれての哥は八幡百番哥合の哥也
哥無義　人しれぬの哥は深養父か娘花薗ノ益河とて内裏につかふ
まつりけるを恋て読ル哥也哥無義ことにいてゝの哥は助内侍を恋て
読る哥也哥ニみなせ河と云地体はみなせと云也ことにいてゝと云事也　君を
のみの哥昌泰三年七月十一日内裏の哥合哥也哥無義　命にもの哥は昌
泰三年同月同日内裏の哥合哥也哥〇無義　春道列樹ハ本ハ小野氏改ノ
レ姓ヲ于時雅楽頭春道新名か子也　あつさ弓の哥は日本記云武蔵

37オ

六葉

あしのめも
はるに

みなせ川

あつさ弓
本末

38オ

37ウ

なにそは

そほふる

春の物とて

国なりける女ナ夫の京へ上りたりけるを恋しかりて此ノ夫ノ置たりける弓をかたみに見て夜はいたきてねゝする事二三年に成けれは此弓にたましゐ出きて夜は本ト未ニ女にひしとすいつきてはなれすひるははなれけり其意を以てあつさ弓もとする

よるとそへて恋ニハ読り此哥は寛平三年七月十一日内裏哥合也

我恋の哥は高光少将の娘の北山に有けるをみて恋しかりて読ル哥也

哥無義　我のみそかなしかりけるの哥は寛平六年十月十一日内裏哥合也無義　今ははやの哥は七条ノ中宮御哥合寛平六年十月

一日ノ哥無義　たのめつゝの哥は同し時の哥合也哥無義

いのちやはの哥になにそはとはなむそと云事也同時哥合哥也

（約一行分余白）

」38ウ

古今和歌集巻第十三　　○恋哥三

やよひのついたちとは貞観十三年三月也しのひに人に物をいひてとは二条后の春宮のみやす所にて西ノたいに住給ける所へ業平忍テ参りたりける時ノ事也そほふる雨ト云ニ二義有一ニハ滋ふる雨を云也万葉云

春雨之弥添雨礼波飛鳥河昨日之淵曽今日波瀬登成ト云り是は

しけく降雨ノ義也此哥ハ人丸ノ哥也二ニハ万葉云　初時雨雨過留多暮尓

袖着笠曽打潤留羅紫ト云り微雨トハすこし降雨也袖着笠ト袖着也

哥ニおきもせすねもせて夜をあかしてとは余ノ恋しさにぬへき夜はねられすおくへきひるはおきられすと云意也春のものとてなかめ暮しつとは二義有一ニハ春雨を春の物ト云されは春の物とてなかめ暮しつと云也　六帖集云ゆかてやは爰にとまらむ春の雨春の物とてふりくらしぬるといへりされは春雨を

春の物と云り二ニハ二条后于時春宮ノ女御にて御座セハ春ノ物トよそになかめ

」39オ

くらしつと云也業平朝臣の家に侍ける女とは業平のいもうと初草の女也
敏行は終に彼女の夫と成し哥無義　返歌にあさみとはあさき所也
よるへなみの哥に云〻汀による波を云也みをとは水の流〻すち也それを
我身によそへて読〻也心〻君か影と成とは我おもふ心はきみか影と成て
はなれしと云心也毛詩表云恋涙不レ乾　見不見君カ心ノ難ニ鬱念ノ恨ミ多ヒコト
知シラセヤスルシラセテヤアル　不　知我カ心ロ　成ナリタランモノヲ　君カ影ト文　源氏云我心きみか影とや成ぬらん身をはなれても
まとふ恋かなといへり　此哥は柏木右衛門督よみて女三ノ宮に
奉る哥也上ノ文意は梁昭明太子人を恋て書テ遣シ給ふけし
やう文のことは也それを毛詩ノ表ニ書入たる也此よるへ波
の哥は中務を恋て定文ニつかはりて敏行かよめる哥也　」39ウ
みまくほしさに　徒にの哥にみまくほしさとはみたさのほしさにと云也此哥業平二条
后ノ事に依て東山におし籠られて有し時后は兄昭宣公ノ許に居給
ひたりし時行けれともあはて帰り〳〵したりし時読たりし哥也　あは
ぬ夜の哥は人丸の読て勝ノ八尾カ娘の許へ遣シける哥也哥無義　秋の
野にの哥は二条ノ后ノ御許へ業平行けれともあひ奉る事のかたけれは読て
ひちまさる　遣シける哥也ひちまさるとはぬれまさるを云也　秋の野にさゝ分し
あさの袖とは大和物語云天武天皇ノ御時桜田利名中将ト云人津国ニ住ける
ときならひの里に源ノ信盛と云人の娘の許に忍ひて通ひけるか
さゝ分しあさの袖　恨ル事や有けん後には行ともあはされは朝夕さゝ分て露にぬれて
あはて帰る事おほしそれを本説にてよめる哥也あさの袖とは
二義有一ニハ朝ノ袖二ニハあさの袖也　みるめなきの哥にかれ　」40オ
なてとは別なてと云意也足たゆくゝるとはあしのたゆきまてく
かれなて　ると云心也此哥は小野小町光高親王におほそれ奉て内裏に
足たゆくくる

まだき

有ける時業平行ともあふことかたかりけれは小野小町読て業
平か許へ遣ス哥也　あはすしての哥は中務をおもひけ
るに源ノ実（サネ）について云事も聞さりける時宗于（ニキ）カよめる
哥也哥無義　有明の哥は序ニ如云一逢事のなきさの哥は津守
にて有し時源ノ常（ツネノ）カ娘の津国西宮に籠り居たりけるを
思ひかけて読て遣ス哥也彼女後ニハ宇多院に思はれ奉りけり其
後山階ノ大将雅経の宝ト成て二人の子有一人は左大将雅俊
一人は中納言朝行哥無義かねてよりの哥にあふ事なきにまた
きたりつとはあふ事なきにまたしき名のたつと云義也此哥に二説有
経信ノ注ニは家持中納言の娘は文徳天皇ノ女御なりしを恋て橘本
好都良（ミトラ）か読たると云也依てみとら大宝二年伊与国に流罪せられけ
ると云々当流には此哥不爾みとらか哥は万葉に兼てより風にさきたつ
浪なれやあふ事なきにまたき物おもふと有是を経信みたかへて
古今の哥をみとらの哥と注セリ爾は僻事歟当流の口伝には此哥の事
委細に有寛平二年二月十五日に嵯峨御堂ニテ金字ノ法花経供養の有
し時若殿上人のみめよき十六人撰て舞をまはせ給ひし時に一条太政
大臣師尹の一男頭ノ中将定時還城楽舞けるを御覧して七条中宮深ク
思ひかけて歎給ひける事世にもれ聞えける時よみ給哥也于時定時少将也
十六人トは蔵人頭藤原良行　右小将藤原遠経　左少将高階師尚（ヒサ）
兵庫頭高階範光　已上左分
式部大輔在原基平　侍従藤原朝行　蔵人少輔藤原道綱
中将藤原保忠　兵部少輔大江行基　修理大夫源為忠
左少将藤原光真　少納言中原宗方　少将平長秀　已上右方

40ウ

41オ

三葉
はやなく
昔も今もしらす

みちのくの哥橘ノ宗光カ娘を恋てよめる哥也哥無義　三春ノ有輔トは
于時若狭守也姓を改ム河内守小野良行か一男小野小町カをい也あやなくとは
無益也此哥は宇多院ノ御時寛平七年三月春日行幸ノ御時人々哥奉り
し時読ル哥也　人はいさの哥に昔ッ今モしらすとは昔ッ今もあはすと云フ意也
此哥は大江千里か家の哥合ニよめる哥也　こりすまの哥に人にくからぬとは人
のにくゝなけれは意あまた文もいとおしき人と有てなき名たちぬへきと
云心也此歌ハ内裏ノ哥合ニ読給聖武天皇ノ御歌也ひむかしの五条よりと云詞
より人しれぬと云まては伊勢物語ニ云か如ッ　しのふれはの哥は延喜七宮
を恋奉て読ル貫之か哥也哥に山より月の出ていれとはわか家を出
て恋しき人の許へくると読ル意也　こひ〳〵ての哥は常康親王伊
勢太神宮ニまいり斎宮ニ留テ斎宮ノ女御をほのかに見奉て恋しかりて

」41ウ

四葉
ことそともなく
しのゝめ
ほから〳〵
今は
いひしらす
長少

読給ふ哥也彼女御は文徳天皇ノ御娘招子内親王なり　秋ノ夜の哥は忠仁公ニ
めされて小町かよめる哥也哥にことそともなくとは事もなくあくると
云義也　なかくともの哥は助内侍を恋て読ル哥也「しのゝめの哥にしのゝ
めとは暁の異名也ほから〳〵とは朗ニなり此哥は利基中将娘を恋て
文徳天皇あそはす御哥也　明ぬとての哥に今はの心とは今はかり
と思心也いひしらすとはことはりしらすと云義也　文選ニ云長少ハ
人不レ避サラサ処何ッ不イヒシラス知理是ヲ歎カント云り長少とはさかへをとろふると云義也
又伯撰ニ云花ハ霞中ニ開テ隠シ其色ヲ一月ハ霧ノ中ニ隠テ失ニ其光ヲ一
不知理哉春秋恨露ハ依レ風消ノ人ハ依友象イサムイヒシラスカナ不言哉二物ノ思ヒ云
りされはいひしらすとは二ノ書様有といへとも同義也哥に哥ニ思ヒそふ
覧とはおもひのそふ事を云也此二条ノ后ニ忍ひてあふて後兄国常大納言の
哥也あけぬとての哥にこきたれとては涙ふかくたれてなくと云事

」42オ

花たれて

也古曽子云花〈色深時者無レ厭レ雨ヲ〉いへりされはこきとは深義也此哥は
二条后を恋奉てよめる哥也　篠目の哥は寛平ノ御時ノ哥
合ニ云り或説には伊勢にあふて後行平中納言よみ給ヲ
哥といへり哥無義　ほとゝきすの哥は仁明天皇ノ御時斉
衡三年ノ大嘗会ニ曼荼羅カ物見ルをみて法眼定海恋ッかりて
後忍ひてあひたりし暁に郭公の鳴ッ事を思出て読て遣す也
定海〈真如親王の御子也曼荼羅〈阿保親王の御子也」42ウ
されはいとこ也まむたらトは在原中将業平也　玉くしけの哥は
寛平八年四月十七日内裏哥合ニ延喜御門春宮の御時あそはせる哥也
哥君か名と可読也　今朝の霜の哥の心はけさおきわかれけむかたも
しらねは思ひけるそかなしきと読ル也しもと云はそれしもなと云義を
霜にそへて読也是は貫之か家の哥合に読ル也　人にあひて朝にみ
て遣スとは小野小町にあふての朝也　ねぬる夜の歌は序ニ如云一
業平朝臣の伊勢国にいたりてと云よりかきくらす心のやみと云
哥までは伊勢物語に云かことし　むはたまの哥に夢にいく
らもまさらさりけりとはいくほともなしと云意也やみのう
つゝとはやみの夜のくらきに纔にあひたる事は夢の
まさしきにいくほとの契ッ目なしと云意也此意は中納言」43オ
兼輔か子ノ光明山ニ侍りける童に始てあふての朝に読て遣ス
光明山の僧都勝延カ哥也勝延は貫之か四男也さよふけての
哥は延喜六年貫之か家ノ哥合に朱雀院ノよみ給哥也哥にあ
まのととは空ノ名也月影にあかすも君をあひみつるとは月影の
あかきにそへて読意也　君か名の哥に難波なるみつとは津国難波

しも

いくらも

あまのと

難波なるみつ

天智天皇の御哥
名取川
むもれ木
水の心
したにを思へ
紫のねすりの衣
いつる夢
六葉
思とち

の三津の浦の事也其を物を見ルによそへて云也此哥は近江の采女にあふて朝ダ天智天皇あそはせる哥也　名とり河はみちの国に有むもれ木とはあらはれぬ義也上ニ如云一此哥ハ染殿の后に忍テあひ奉て紀真成ノ中納言ノ哥也是ハ名虎大臣ノ三男染殿の后にはいとこなり染殿ノ后ノ母は紀名虎かいもうと也　吉野河の哥心はしたに思ふ心ははやくとも音にはたてゝ啼カシ人もそしると読り水の心と云事は花厳経ニ三種心水ト説リ三毒の水を三悪の濁水と云ヒ三菩提の水を三善の心水と云水は器に随てすかたを現ッ心ハ境ニ依て変ッ故に譬へて心を水とする也此哥は貞観十二年十月廿八日内裏哥合に二条后ノ御哥也　恋敷はの哥にしたにを思へともあらはれて下にも思へと云心也を文字はやすめ字也紫のねすりの衣ト云に二義有後漢書ニ云三更別レノ之後紫衣未乾カ書タリ　文の意は大国に或ル臣下始て女にあひたりけるに彼女の着たりける紫の衣汗にぬれて男の身にうつりたり男彼女の恋かりけれは此紫をきぬにうつして置テ形見ト見ル寝ッ汗にぬれて絹にうつりたる故に紫の手すりの衣と云也又云大和物語云橘の始祖女の許へ忍ひて行給ひたりけるに彼女寝なから紫のすりをし居たりけるをみて其面影の忘れかたかりけるによりして思と成死けり其より紫ッねすりの衣と云事をは恋に読リ又紫ッ根ニテすりたる衣をねすり衣と云一義有也色にいつる夢トハ此思ヒ夢にもみゆなと云心也此哥は五条ノ后を恋て仁明天皇読給未タ后トモ成給はさりし時ノ事也　花すゝきの哥は四条ノ后を恋て読ル哥也本文如上　橘の清樹トは橘ノ数雄子也于時大和守也忍ひにあひしれる女とは平ノ中興か娘也是は光孝天皇ノ内裏に仕ッまつりけるを清樹忍ひて通也哥に思ふとちは思ッ友也

」43ウ

」44オ

藤衣と云は上如云返哥に義なしぬきかへかてらとはこと衣をきむと云心也
うつゝにはの哥に人目をよくとは人めをのそく也此哥心はうつゝにこそ
人めを忍はめ夢にさへ人目を忍かなしさよと読也或本ニ云みなかすへなさ
と有それもわひしき義也此哥は業平を恋てよめる哥也
かきりなきの哥は同人を恋てよめり哥ニ無義　夢路にもの
哥は大江ノ惟章を恋て読ル哥也思へともの哥に人めつゝみとは人めつゝむ
をよそへて読ル也河をみなからとはあはとみなからと云義也五音にてしるへし
此哥は七条ノ中宮をつねにみ奉れとも互の心はかりかよひてあふ事かたかり
けれは読る藤原忠房中将ノ哥也　たきつせの哥心は滝津瀬のはやき
様に思心めをつゝみてあふ事かたしと読り此哥は七条中宮を恋奉て
貫之か読ル哥也　寛平の御時ノ哥合とは寛平六年四月十七日哥合也
紅の哥にかくれぬとは草をひ滋(シケリ)てかくれたる沼也冬の池の歌に
すむ鳰(ニホ)とりとは普通のにほと云鳥也此歌も前の哥合と同時也　さゝの葉
の哥にしみはつくともとは人にしみつくとも色に出てあらはれしと云心也
しみとは氷ノ也此哥は貫之か家の哥合ニ読り　山しなのをとはの山の哥は
天智天皇を恋奉て近江ノ采女か読り　みつしほの哥になかれひるまとは
つきぬ思ひの心也後漢書云長栄公カ恨ミ未レ尽倒澤ッ浦ニ如不レ洩(ヒカ)レ塩タ長栄公トハ
漢皇ノ臣下也后を恋奉ル事思ひ不レ尽事を云也倒澤ノ浦トハ明州ニ有処也
すへて塩のひぬ処也故ニ不レ尽事に彼処を書也されは流レひるまのあひかたみ
とはみつ塩の流レひる事にあひかたしと云哥也みるめ浦によるをこそまてとは
君をみむことをこそ侍と云也此哥は中務か和哥浦の玉津嶋ニ籠たるを
深養父も共ニ籠ッあひてみ初て後ニ読て遣ス哥也　白河の哥にそこきよ
みとは底清ト云心也此哥は有常か娘を恋て読ル哥也なかれて世ゝにすむと

川と見なから

かくれぬの

しみはつくとも

七葉
なかれひるま

中務玉津嶋に籠ルコト
そこ清み

」44ウ

」45オ

思へはとはひさしく君とあはむと思へはと云心也　したにのみの哥に玉の緒のたえてみたれん人なとかめそとは下に思ふかくるしきに死なんと思に人とかむなと云心也此哥は延喜三年の哥合也　我恋の哥に山橘とは色に出る物に読へし万葉云　槇木之穴無之山野（マキモクノアナシノヤマノ）」45ウ

山橘

時雨丹毛不敢色付山橘野色丹中出怒留　されは色に出る事に是を読ル也此哥は同時滋春か家の哥合に読ル也　大かたの哥は我身すみなと漕出なんと云は忍もくるしきに我身も皆あらはれんと云リ世をうみへたにみるめすくなしとは世をうらむれとす見る事少シトいへり此哥は源ノ融卿てる妃とて時無双の美女也是を思食懸て読て遣ニ平城天皇の御哥也　枕よりの哥は貞観六年九月十三日夜ニ百首の哥業平かすゝめけるに読る哥也哥無義　風吹はの哥は文武天皇后を恋奉て人丸の読る哥也後に彼の后をは人丸にたにたりと云り此后は勝八尾の娘也哥無義あふことはの哥に玉の緒はかりとは念珠の緒のほそきか如シ名の立事は吉野の滝の如にふとしと云也此哥は曼荼羅に忍ひ〳〵にみあふこと世にもれけれは定海の読る哥也　村鳥哥にことなしふともとはことなくとも云義也又は事きれすと云心也といへり家持か家の集ニ云　我妻賀無事土毛宇土真礼須猶行末之契思波（ワカセコカコトシウトモウトマレユスナホユクスエノチキリヲヘハ）」46オ

玉の緒はかり

事なしふとも

此哥の心は事なしと云義也此哥は深養父の娘を恋給て延喜第一の御子重明の親王の読給御哥也　君によりの哥は我名は花にとは我名は花のちるか如ゝちれりといへり此哥は小町に名たちて読給光孝天皇のいまた親王の御時の哥也　哥に君によりとは君によりとは君に依て我名は立と云也しかといへは哥に塵ならぬ

ちりならぬ名

名の空に立とは長能カ記ニ云事也君ニ候レスル臣ニ者ハ以ニ賢道ヲ為孝苦シテ
レ民ヲ侵レ君ヲ其名立塵ヒ書リ是ハ史記を引ク詞也此意を読ル也
此哥は寛平六年十月廿六日哥合の哥也

」46ウ
」後見返し
」後表紙